

佐藤春夫の新聞小説「極楽から来た」における 芹沢銈介作挿絵の図様改変について — 芹沢銈介宛 小川龍彦師書簡を通して —

福地 佳代子 濱田 淑子

About figure change of the Serizawa Keisuke's illustration in Sato Haruo's serial story
"Gokuraku kara kita"
: Through the letter of Ogawa Tatsuhiko addressed to Serizawa Keisuke.

FUKUCHI Kayoko HAMADA Syukuko

キーワード：「極楽から来た」 芹沢銈介 佐藤春夫 小川龍彦

要旨

昭和35（1960）年6月22日～12月12日にかけて朝日新聞に連載された佐藤春夫の小説「極楽から来た」で、芹沢銈介は挿絵を型絵染の技法で表現するという初の試みに挑戦した。新聞連載「極楽から来た」は好評を博し、翌年2月に単行本が刊行、7月には挿絵のみを独立させた芹沢銈介作「極楽から来た挿絵集」が頒布されたが、その都度一部の挿絵には改変が加えられた。「極楽から来た」の制作において、芹沢と佐藤との間をとりもった明石・無量光寺の住職小川龍彦師は、連載の開始前から終了後まで、約130通の書簡を芹沢に送っており、その中には佐藤春夫の意向を受けた改変依頼をはじめ、図様の誤りや出版社による掲載順の間違いなど、重要な指摘がある。小川師書簡の精査を通して、「極楽から来た」制作のいきさつと、芹沢の試行の跡をたどる。

Abstract

"Gokuraku Kara Kita" by Sato Haruo was originally serialized in the *Asahi Shinbun* newspaper between June 22 and December 12, 1960, with 173 illustrations by Serizawa Keisuke. This was the first time, Serizawa had created newspaper illustrations using a stencil-dyeing on paper process. The series proved very popular, and many readers took note of Serizawa's illustrations. When the series came out in book form, in May 1961, Serizawa designed the cover. Then in July 1961, he independently republished his 173 dramatic, stencil dyed illustrations with hand-painted details. In developing a new project, illustrations are often changed. For the project that they undertook for the *Asahi Shinbun* newspaper, Ogawa Tatsuhiko corresponded with Sato and Serizawa. The 130 letters which Ogawa wrote to Serizawa yield important insight into this process. For example, Sato's desire to modify illustrations, errors in the figures, printing mistakes by the publishing company, etc. Examining Ogawa's letters in detail, we hope to better understand the circumstances involved in producing "Gokuraku Kara Kita" and gain insight into Serizawa's process of trial and error.

はじめに

昭和35（1960）年6月22日～12月12日までの173回にわたり、朝日新聞に法然上人の生涯を描いた佐藤春夫の小説「極楽から来た」が連載された。その挿絵を担当したのが芹沢銈介であり、彼にとっては、挿絵を型絵染の技法で表現するという、画期的な初めての仕事となった。新聞なので、

当然墨濃淡のモノクロームである。12月12日に新聞連載が終わってまもなくの昭和36（1961）年2月には、講談社から単行本『極楽から来た』が出版された。新聞連載時の挿絵型紙の多くを採用した、モノクローム図版である。

建暦2（1212）年1月25日、浄土宗の宗祖・法然上人は

80年の生涯を終えた。平成23（2011）年は、その時から数えて法然上人800年大遠忌、すなわち法然上人が亡くなり800年が経った記念すべき年忌の年に当たっていた。浄土宗は、これを機に法然上人の教えを現代的にとらえ再認識しようと、様々な記念事業を企画した。数年前から顕彰事業、教化事業、法要事業、広報事業、念仏行脚事業を立ち上げ、一丸となって事業を推進したのである。事業の中のひとつとして企画されたのが、昭和36（1961）年に講談社から発刊され、絶版となっていた名作、佐藤春夫著・芹沢銈介挿絵による『極楽から来た』を復刻出版することだった。浄土宗は出版について東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館の芹沢恵子副館長を訪ね、「なんとか許可をいただきたい」と要望された。

佐藤春夫ご遺族からはすでに出版の許可をいただいているということだった。芹沢副館長は「昭和36年に講談社から出版された本と、まったく同じ体裁で復刻するならば許可する」ことを伝え、この出版事業は開始された。準備が進められていた平成21（2009）年になると、浄土宗文化局の出版担当者が副館長を訪問され、「今回の出版に際しては、芹沢先生の装幀を踏襲するが、挿絵については時代の要請にこたえてカラー版にしたい」との意向が示された。「講談社版単行本は古本で手に入れたので複製可能だが、全葉筆彩の挿絵集を手に入れることは困難」との相談もあった。その結果、副館長所蔵の『極楽から来た挿絵集』（1969年3月刊行の工房版）は一部筆彩であったため、昭和36（1961）年7月に吾八から刊行された全葉筆彩の大原美術館本を採用することに決まり、新たに撮影した画像が使用された¹⁾。さらに、編集作業が大詰めとなった9月になると、再び担当者から副館長に「挿絵の順番を一部変更してもよいだろうか」との連絡があった。その内容とは、次のようなことである。

- ① 第八章 雲上の醜聞（四）「歌菩薩 金剛界三十七尊のうち」と、（五）の「愛宕山中の呪詛」の挿絵が逆だと思うので、入れ替えて良いか。
- ② 第二十七章 穢土のかたみ（四）の挿絵と付録章 一枚起請文（二）の「南無阿弥陀佛」を入れ替えた方がよいのではないか。

副館長から意見を求められた筆者（濱田）は、講談社版を読み、①については確かに順番が入れ違ったと確信した。この時期芹沢は、鎌倉市・津の坂巻家の農家の離れを借りて工房

とし、3～4日の独居生活をして仕事をこなし、東京・蒲田の自宅に戻るといって生活をしていた。佐藤春夫が書いた原稿数回分が届けられ、それに合わせて挿絵を作り新聞社に渡すということだったから、新聞社が挿絵掲載順を間違うことも充分考えられた。この時、「取り違えたことを裏付ける参考資料はないだろうか」と考えて開いてみたのが、明石・無量光寺住職の小川龍彦師から芹沢銈介に送られた書簡資料だった。昭和63（1988）年、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館建設準備に関わっていた筆者（濱田）は、芹沢長介前館長から、昭和35（1960）年6月17日朝付～翌年1月3日夕付までの書簡（封書とハガキ）を、トレーシングペーパーに丁寧に張り付けて綴じた冊子を「当館収蔵資料とするよう」と預かった。書簡には、朝日新聞に連載中の「極楽から来た」挿絵に対する小川龍彦師の率直な感想、そして貴重な指摘が記されていた。

①についての部分を調べてみたところ、昭和35（1960）年8月5日夜付のハガキに「昨夕の歌菩薩と矢張り後先、入れ違ってしまったのだとわかりました。少し社の方ではたのでせう」とあり、小川師も間違いに気づいていたことがわかった。数回分の挿絵を受け取った新聞社が、順序を間違えて掲載したのである。

②については、「穢土のかたみ」（四）の挿絵が掲載された時期の1か月分の書簡が途絶えていた。その上この部分の挿絵については何の指摘もない²⁾。挿絵を見る限り、「65歳の法然上人が、4月8日、病床で『歿後遺戒文』という門弟たちに宛てた遺書を作った」との佐藤春夫の文章とぴったり合っている。外には柳と満開の桜が咲いて、季節も合致している。この後上人の病は気候の温暖とともに快方に向かうという小説の内容である。新聞挿絵と、昭和36年に講談社が刊行した単行本の墨一色の挿絵には、表題がなにもない。佐藤春夫の文章があるから、挿絵に表題を入れる必要はなかったのだが、『極楽から来た挿絵集』（筆彩）では「一枚起請文 建暦二年正月」の表題が加えられた。「一枚起請文」を源智に授けたのは建暦2年（1212）1月のことで、その画面が「付録章 一枚起請文」三の挿絵「南無阿弥陀佛」の文字。まさに佐藤春夫の文章の「ただ往生極楽の爲めには南無阿弥陀仏と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には別の子細候わず」に呼応した挿絵である。上人はこのあと1月25日に入寂なさる。連載最終日前日の「一枚起請文」（三）の挿

絵の日にあたる12月11日夜付の小川のはがきに、「只今帰宅、お送りいただいた御名号を披き、御光に照らされて、つつしんで拝礼、(中略)最もふさはしい挿絵を得て文もいよいよ輝きを増し得て幸です」とあり、「南無阿弥陀仏」の挿絵に感服する言葉だけで、訂正の指示や指摘はない。挿絵集作成の段階に、誤って「一枚起請文 建暦二年正月」の表題を入れたことが問題を生む原因であった。

その結果、芹沢副館長は「①については新聞社の間違いから生じたことであるので、新版を出版するにあたり訂正してよい、②の問題は挿絵画面は合致しているので、昭和36年当時の挿絵順番そのままにする」との結論を浄土宗文化局の出版担当に伝えた。その意を受けた浄土宗は、一ヶ所だけ訂正した上で、平成21(2009)年11月1日、佐藤春夫著、芹沢銈介挿絵による『新版 極楽から来た』を出版した。

浄土宗文化局からの問い合わせ事項確認のために読んだ「芹沢銈介宛 小川龍彦師書簡」だったが、その折に、書簡の中に「アミダ如来立像の印相、信西の図、清水舞台、聖光肖像、星空の背景」など、小川師が訂正してほしい画面の指摘が数か所あることに気づいた。開館前に寄贈を受け、必要に応じて読んでいたものの、これまで書簡を精読検討することがなかった。昨年、明石・無量光寺の散華調査³⁾をきっかけにいただいた小川龍彦師ご遺族との縁を継続して生かすためにも、開館以来課題となっていた「芹沢銈介宛 小川龍彦師書簡」130通を精査することにより、「新聞挿絵」(昭和35年)から『極楽から来た』単行本(昭和36年2月)、『極楽から来た挿絵集』(昭和36年7月)制作に至るまでの、芹沢の試行の跡をたどり、さらに小川龍彦師を仲立ちにして交わされた佐藤春夫、芹沢銈介のやり取りから「極楽から来た」挿絵制作のいきさつを探ってみたい。

1 「極楽から来た」関連資料

①「極楽から来た」新聞切り抜き帖 (図1)

32.8×28.0 (cm) 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

昭和35(1960)年6月22日～12月22日まで朝日新聞に掲載した173回分を切り抜いて貼り付けたスクラップブック。

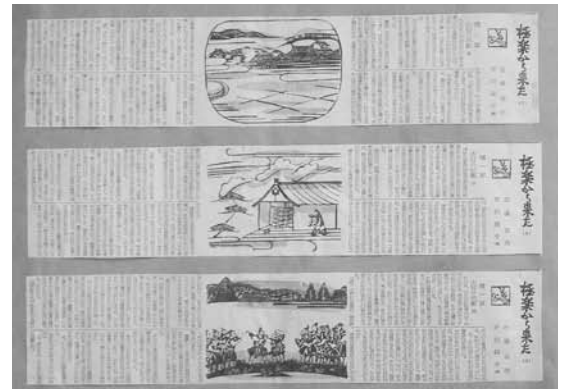


図1「極楽から来た 新聞切り抜き帖」(部分)

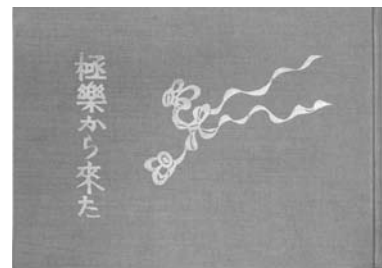


図2『極楽から来た』講談社 昭和36年
(上：表紙、下：外函)

②佐藤春夫著 芹沢銈介挿絵 『極楽から来た』 (図2)

昭和36(1961)年2月 講談社 15.4×21.5 厚2.0 (cm)

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

新聞連載が好評であったことをうけて刊行された単行本。挿絵は墨一色のモノクロで全図が掲載された。外函、表紙、見返し、扉の装幀を芹沢銈介が担当した。



図3「極楽から来た挿絵集試作本」(和綴本)



図4「『極楽から来た』講談社版単行本外函下絵」



図5「極楽から来た挿絵集試作本」



図6『極楽から来た挿絵集』

③「極楽から来た挿絵集試作本」(和綴本) (図3)

29.2 × 26.4 厚2.2 (cm) 個人蔵

奥付：墨書「昭和36年春開版 芹沢銈介型絵 吾八刊」

目次：墨書

型絵染挿絵5枚貼込み

表紙には梵字キリーク（阿弥陀如来）を肉筆で書く。この本に、画用紙に顔彩で描いた昭和36（1961）年に講談社刊行の単行本の函の試作（図4）がはさみこんであった。右上部に鉛筆で「外函」の表記。函のデザインは最終的に「極楽世界楼閣池水図」に決したが、それまでに雲取文様を思わせる幾何学的なデザインも考えていたことがわかる。

④「極楽から来た挿絵集試作本」(図5)

40.3 × 62.6 (cm) 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

ハトロ紙に扉と173図の挿絵を貼って綴じた試作本。5図のみ筆彩。

⑤『極楽から来た挿絵集』(図6)

吾八 32.5 × 28.0 厚さ3.5 (cm)

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

全214ページ、173図の挿絵だけを集めた型染絵本。昭和44（1969）年3月刊行の工房版（工房関係者に贈った）12部のうちの第7番で、金泥布帛入り、表紙は宝珠金箔置漆、筆彩56図の一部筆彩本である。ほかに、昭和36年7月刊行の限定150部（うち15部は全葉筆彩、春慶塗函入り）と家蔵本35部、昭和39年4月に著者用として装幀を改めて刊行した私家本15部がある。

⑥「極楽から来た」絵抄

昭和36（1961）年7月 神戸市葦合区生田町・東極楽寺（頒布会事務所） 限定66部（48願本と18願本とを合して） 帙 頒布会趣旨付

表紙に挿絵「歌菩薩」を採用した10ページの趣旨（個人蔵）が付いている。それによると、新聞挿絵、講談社版では墨一

色であったため、「挿絵原図に顔彩を加え、金彩も取り入れて華麗な多彩染絵としてこれを完成」すること、さらに750年御忌に際して「小川師の永年の法然上人研究の労を、いささかねぎらはんがために」、師が挿絵15図を選んだ「極楽から来た」絵抄（限定48部）を完成させた。A版は33部で彩色が3図、墨一色が12図、B版は10部で彩色が6図、墨一色が9図、C版5部は全図彩色とある。選ばれた15図は「法然上人肖像図（法然上人源空像）」「夜討（定明討入の夜の勢至丸）」「菩提寺（山路行く師弟）」「母秦氏（しとりの里の母秦氏）」「歌菩薩」「二祖対面」「御名号（南無阿弥陀仏）」「一ノ谷戦（須磨の浦）」「吉水僧園地図（東山吉水）」「清水説法（法然清水寺説戒）」「頭光踏蓮（上人頭光踏蓮図 関白九条兼実感見）」「松虫鈴虫」「極楽図（極楽世界楼閣池水図）」「勝尾寺（勝尾寺の幽棲）」「来迎図（建暦二年正月廿五日午正中 世寿八十）」である⁴⁾。佐藤春夫サイン入りの「極楽から来た」原稿コロタイプ複製も付されたという。



⑦「極楽からきた」挿絵一枚刷り（図7）

1960年 紙本型絵染

26.5×33.5～38.0×30.5（cm）

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

筆彩色95枚 墨一色166枚

墨一色166枚中には、当初の新聞原画と考えられる146枚が含まれている。筆彩のものの中には、やのサインが入ったものや芹沢自身が表題を墨書したものがあり、特別な進呈用、あるいは額装用として制作されたものと考えられる。昭和36年5月16日から21日まで、日本橋三越7Fギャラリーで「極楽から来た」芹沢銈介挿絵展が開催され⁵⁾、一枚ずつ額装した挿絵を展示した。一枚刷り作品は、挿絵集の試作染であるか、あるいはこの時の展覧会用作品とも考えられる。

⑧ 極楽から来た八曲屏風（口絵1）

1960年 紙本型絵染 155.5×342.8（cm）

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

日本民藝館には「極楽から来た挿絵集」から40図を選んで八曲屏風に仕立てた作品がある。東北福祉大学芹沢銈介美術

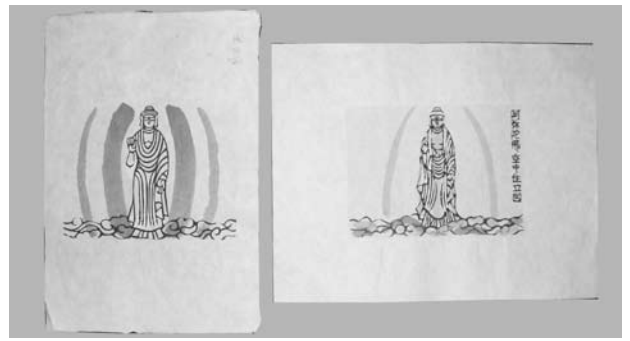


図7「極楽から来た 挿絵一枚刷り」
（左：墨一色 右：筆彩色）

工芸館でもその作品を参考に、⑦の一枚刷り作品の中から同じ画面を選び、1992（平成4）年に屏風を作成した。一扇に5図を貼り込んでいるが、それぞれの画面は、一扇目上から「上人降誕 長承二年四月七日、定明討入の夜の勢至丸、漆時国の遺告、小矢児山に入る、極楽から来た人」、二扇目上から「那岐山頂、極楽談義、極楽世界楼閣池水図、勢至丸台嶺に登る、関白忠通の行列に会ふ 鳥羽作道」、三扇目上から「登壇受戒 御歳十五、黒谷に叡空の門をたゞく、釈迦堂の参籠、夢中の母 秦氏、南都古寺遊歴」、四扇目上から「保元の乱、黒谷 青龍寺、再棲叡岳、二祖対面、法然下山」、五扇目上から「西山の草庵、院と平家と山と、古都は荒れ 新都未だ成らず、大佛殿炎上 治承四年十二月廿八日、大原問答 龍禅寺」、六扇目上から「法然上人源空像、法然清水寺説戒、一枚起請文（歿後遺戒文の誤り） 建暦二年正月、水火二河白道図、房籠の法然」、七扇目上から「念仏停止の三塔の群議、七ヶ条の制戒、流入綽空、上人頭光踏蓮図 関白九条兼実感見、配流の門出 鳥羽作道」、八扇目上から、「室津の遊女 上人の船へ、わが身のものとては、勝尾寺の幽棲、南無阿弥陀仏、建暦二年正月廿五日午正中 世寿御八十」である。

⑨ 佐藤春夫著 芹沢銈介挿絵 『新版 極楽から来た』

平成21（2009）年11月1日 浄土宗

15.4×21.5 厚さ2.2（cm）

②の講談社本を復刊したものだが、大きく変更したのは、挿絵をカラーにしたことである。その際、挿絵は、『極楽から来た挿絵集』（昭和36年7月）の大原美術館蔵の全葉筆彩本を使用しているため挿絵内に表題も挿入された。また「はじめに」で説明したように、朝日新聞に連載された当初から挿絵が入れ替わって掲載されたことが明らかな、「歌菩薩」と「愛宕山中の呪詛」については順番を訂正の上出版した。

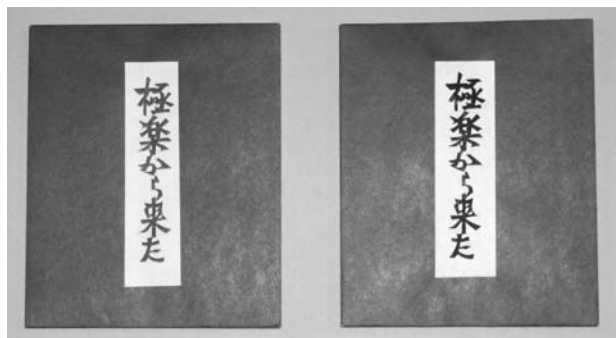


図8「極楽から来た」カットの下絵・試作・型紙貼込折本

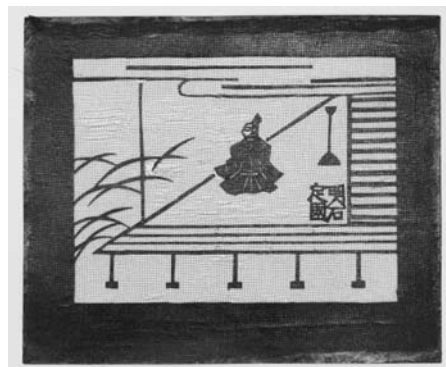


図9「極楽から来た 挿絵型紙」6月22日（第一回）

⑩「極楽から来た」カットの下絵・試作・型紙

各18.2×15.1 厚さ1.2 (cm) 個人蔵 (図8)
2冊 (A.1～115 B.116～173)

新聞挿絵の表題上に付されたカット下絵と型紙のうち、手元に残っていたものを、長男・芹沢長介氏が整理し、折本仕立てにした資料。小川師書簡の12月12日のハガキに、付録章のカットについて「あのカットは大変立派です。全くおごそかな姿に心を正されます。セイシ菩薩の智慧のシンボルを採られたのだと思いますが、カッコウなうてつけのものを選ばれたと思いました」と記している。カットにも心を砕き制作した、芹沢の細心さがうかがえる。

⑪「極楽から来た」挿絵の型紙22枚 (図9)

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

全てが新聞掲載挿絵の原図そのままというわけではなく、表題が彫られた型紙が入っていて、挿絵集題箋も含まれる。従ってこれらは挿絵集制作に使用された型紙であることが分かる。挿絵集刊行に際して、新聞挿絵や講談社の単行本で使用した型紙に、表題だけを彫った型紙を貼りつけて使用した⁶⁾。型紙の中には挿絵に採用されなかった試作の型紙も含まれる。

2 挿絵図様の改変と小川龍彦師書簡

芹沢銈介が新聞小説「極楽から来た」の挿絵を担当することになったのには、芹沢と二十数年来の親交がありかつ佐藤春夫を自らの文学上の師とする小川龍彦師の仲立ちがあった。小川師は、明治33(1900)年に兵庫県尼崎市東大島の宝樹院に生まれ、京都東山中学から早稲田大学文科を経て大正大学を卒業後文筆活動に入り、昭和4(1929)年に明石・無量光寺(浄土宗)の住職となった。佐藤春夫との出会いは早稲田大学在学中に遡る。翻訳の手伝いをするなどして佐藤

家に入りし篤い信頼を得た小川師は、生涯にわたるよき師友関係を結んだ。一方で小川師は浄土宗史・法然上人の研究家としても、昭和45(1970)年に刊行した『一枚起請文原本の研究』(「一枚起請文原本の研究」刊行会)に代表される多くの業績を残している⁷⁾。小川師には文筆の素養と、浄土宗の学僧としての教養、法然研究家としての資料や研究成果が備わっていたのである。

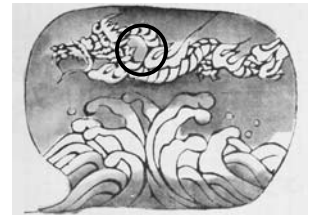
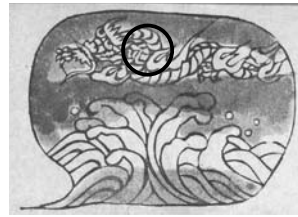
新聞連載の開始前から終了後まで、小川師と芹沢との間で「極楽から来た」に関する事柄を中心に数多くの書簡がやりとりされた。現在、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館にスクラップブックとして残る芹沢銈介宛の小川師書簡は、昭和35(1960)年6月17日から翌年明けの1月3日の日付をもつもので、朝夕に投函された日もあるが日数でいうと84日分、数にして手紙が20通(39枚)、はがきが83枚、郵便書簡が25通に及ぶ⁸⁾。書簡には日々新たに感じる感動と作家への共感などが綴られると同時に、図様の改変に関わるいくつかの重要な指摘や提言がなされている。

昭和35(1960)年6月22日～12月22日まで朝日新聞の夕刊に連載された「極楽から来た」は、はじめ染色作家を挿絵に起用することに不安をみせた新聞社の予想を裏切り、上々の評判を得て翌年の2月には講談社より本文と挿絵を合わせた単行本『極楽から来た』が刊行された。その後、7月には吾八より新聞掲載時の挿絵のみを独立させた芹沢銈介作「極楽から来た挿絵集」(限定150部、内15部が全葉筆彩)が刊行された。

朝日新聞や講談社単行本の挿絵原画、また挿絵集をはじめとする極楽から来た関連作品は、いずれも新聞連載時の挿絵の型紙を用いて制作された一連の作品であるが、その都度行われた色差しを別として、一部に型紙自体を修正変更したと見られる図様が認められる。特に改変の跡が顕著なのは、新聞連載時の挿絵(以下、新聞版)と講談社刊行単行本の挿絵(以下、講談社版)との間である。そこで以下に、小川師書簡における挿絵図様に関する記述に注目しつつ、図様の改変について指摘する。

図10 「極楽から来た」挿絵（左：新聞版 右：講談社版）

6月23日（第二回）



1) 新聞版から講談社版への図像改変（図10）

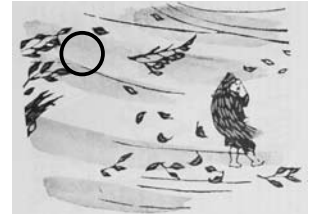
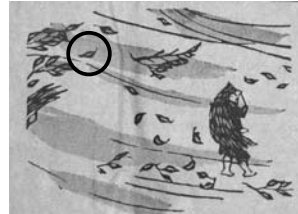
6月23日（第二回）「定國の夢」

龍の鱗の一部（胸前）が欠ける。

6月24日（第三回）「父の行方を探す定明」

強風に舞う木の葉の一枚が欠ける。

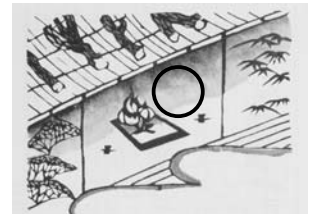
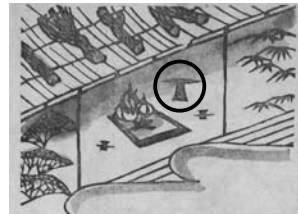
6月24日（第三回）



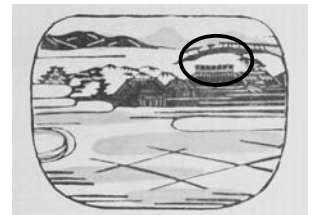
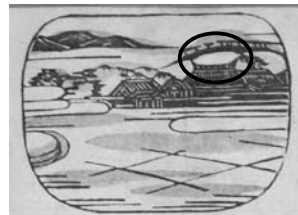
6月25日（第四回）「定明父を求めて叔父を訪ぬ」

囲炉裏のわきの高杯を消す。高杯がなくなったことにより空白が広がり、人が立ち去った後の一抹の寂しさのような余韻が醸し出されている。小川師書簡によると「先日佐藤邸での話ですが、第四図のいろりが師匠には何かわからず、これは何なのかなと云ふわけで、ゐろりで、客を送って出た後ですと云へばああそうかと云ふ事でしたから、これなどは師匠はヒョッとすると離れすぎてゐると思はれたのかも知れません。」（7/14）とあり、佐藤の所感を踏まえた変更であったのかもしれない。

6月25日（第四回）



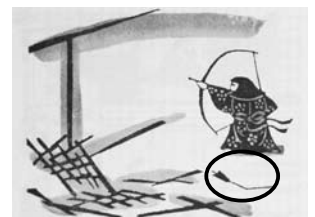
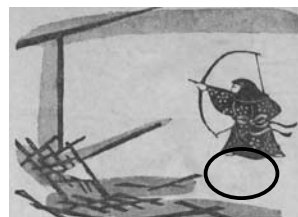
6月28日（第七回）



6月28日（第七回）「稲岡の荘 漆氏の居館」

母屋の屋根の形を変更。「昨日の漆館の威容仲々立派で大したものです。但し、これは少し徳川期めいた感じ強しと見たのは小生のひがめにや。矢張り何かに一時代古き方よろしと見るは私の好みかもしれません。」（6/29）とある。

7月1日（第十回）



7月1日（第十回）「定明討入の夜の勢至丸」

童子の足元に折れた矢が追加される。新聞版では単に荒れた廃屋のようにも見えるが、講談社版では折れた矢によって乱闘の場面であることが強調されている。

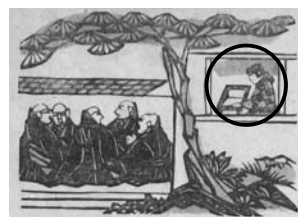
7月2日（第十一回）



7月2日（第十一回）「漆時国の遺告」

左下の武人の髻が欠ける。

7月7日（第十六回）



7月7日（第十六回）「菩提寺圩頂童子書窓図」

建物の窓の形が変更され、窓の内より童子の姿が消される。

7月8日（第十七回）「山路行く師弟」

僧侶のまとう袈裟にしわが加えられる。また左手前の草花を黒地から白地に改める。

7月11日（第二〇回）「童兒独り祈る」

童子の髪型や顔だち、服装が変更される。服装では小袖が水玉模様になっており、これは翌日7月12日の「極楽談義」に登場する勢至丸の小袖も水玉模様であることから、共通性をもたせ同一人物であることを強調したものであろう。

7月16日（第二五回）「阿弥陀佛空中往立図」

阿弥陀如来の印相が施無畏・与願印から来迎印に改められており、面相や着衣も異なる。

7月30日（第三九回）「南都古寺遊歴」

背景の塀や石段がわずかに異なる。

7月31日（第四〇回）「保元の乱」

左から三番目の人物の手から弓がなくなっている。

8月2日（第四二回）「白河院愛育璋子図」

上部に散らされた三角形の一部が欠ける。

8月4日（第四四回）「金剛界三十七尊のうち歌菩薩」

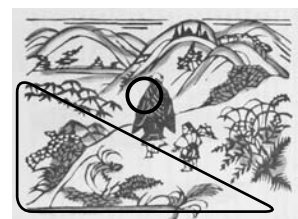
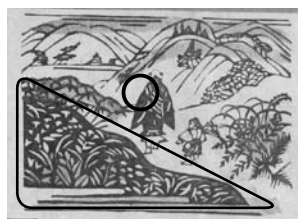
8月5日（第四五回）「愛宕山中の呪詛」

8月4日と8月5日とで挿絵が入れ換わっている。「はじめに」で述べたように、小川師の「昨夕の歌菩薩と矢張り後先、入れ違ってゐたのだとわかりました。少し社の方ではたのでせう。」(8/5)との指摘により、挿絵の取り違えが裏付けられた。ただし小川師の指摘を受けた後も、新聞版から講談社版、さらに挿絵集へと順番の修正はなされないままに作品は世に出されており、2009年に浄土宗より刊行された『新版 極楽から来た』において改めて「愛宕山中の呪詛」から「金剛界三十七尊のうち歌菩薩」へと小説の本文に即した並び順に訂正されることになった。

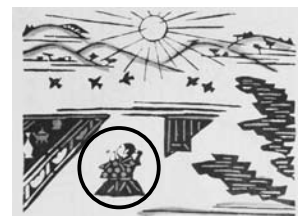
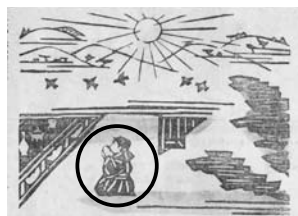
8月15日（第五五回）「衰へは髪かたちばかりかは」

衣の重なりが増えより十二単らしくなっている。

7月8日（第十七回）



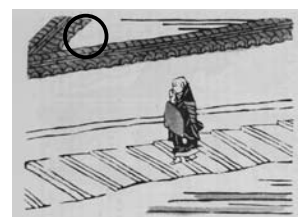
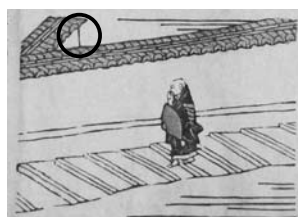
7月11日（第二〇回）



7月16日（第二五回）



7月30日（第三九回）



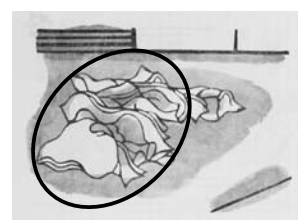
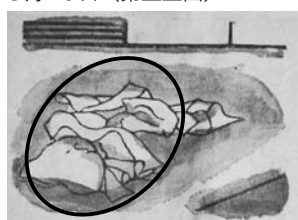
7月31日（第四〇回）



8月2日（第四二回）



8月15日（第五五回）



8月16日（第五六回）「信頼と信西」

人物の間の余白が狭まり、人物の左右の切れていた部分が画面に納められた。東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵の「極楽から来た 挿絵一枚刷り」（以下、一枚刷り）の中に、新聞版の原本とみられる一枚がある。それは、二人の人物を一度切り抜き、余白を広げて貼り付けたものである。両者の違いは、新聞版の原本において切り貼りにより構図の変更を行ったために、講談社版制作の際、型紙の状態の図様に戻ったものであろう。以下の図様の中にも同様の改変箇所が複数確認されるが、おそらく、構図における芹沢の意図するところは新聞版にあると考えられる。

8月17日（第五七回）「信西最期」

洞穴の中の人物が4名から1名へ変更される。信西は烏帽子を被らず伸びた髪を後ろで束ねるのみで、穴の周囲には雑草が生え、荒んだ感じが増している。この点に関しては、小川師書簡に「第五十七図 信西ノ図 穴の中には信西丈が入ってゐる図にしてはしく佐藤師匠の話でした。」(12/22)とあり、佐藤春夫の意向であったことがわかる。

8月23日（第六三回）「藤原成通」

蹴鞠の場面が清水寺の舞台に変更される。

8月29日（第六九回）「春宵歌会」

上部の箔散らし風の部分が変更されている。また左から3番目の人物の手元の紙が見られない。

8月30日（第七〇回）「渡辺唱と堅者豪運」

画面左上の渡辺唱を髭のある武人の顔へ変更。

8月31日（第七一回）「椿房の小侍従」

三日月から満月へ。一枚刷りの中のある新聞版原本を確認すると、三日月部分は別紙を貼り付けた修正によるものであることから、講談社版の満月は、意図せずして型紙の図様に戻ったと考えられる。

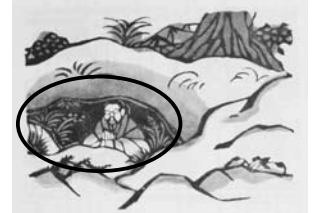
9月2日（第七三回）「公達花下遊宴」

講談社版では、舞い散る桜の花弁が4枚多くなっている。一枚刷りの新聞版原本では当該の花弁があえて切り抜かれていたため、バランスを考慮した新聞版が本来の姿であろう。

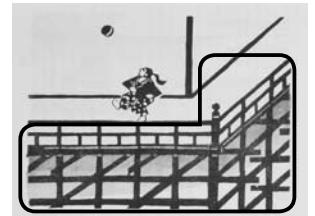
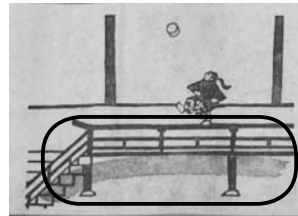
8月16日（第五六回）



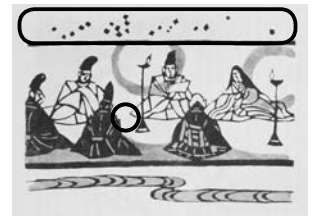
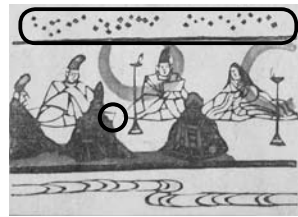
8月17日（第五七回）



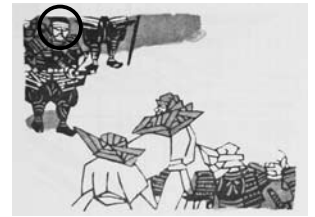
8月23日（第六三回）



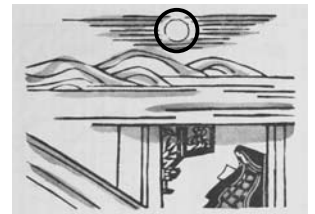
8月29日（第六九回）



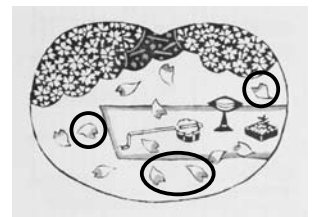
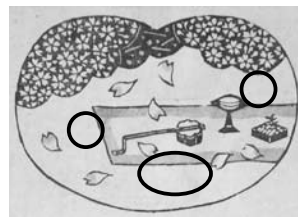
8月30日（第七〇回）



8月31日（第七一回）



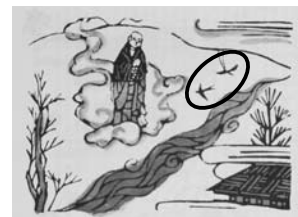
9月2日（第七三回）



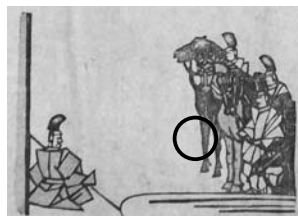
9月19日（第九〇回）「二祖対面」

雲や波に一部変更が見られ、鳥が二羽描き加えられる。なお、本図は「極楽から来た挿絵集」制作の際に再度雲が修正され、鳥が削除されている。

9月19日（第九〇回）



9月29日（第九九回）



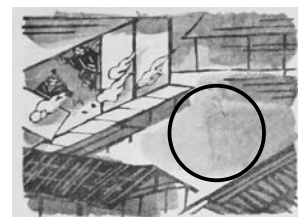
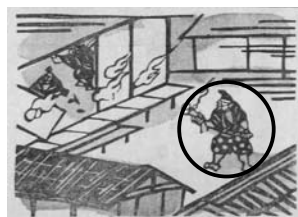
9月29日（第九九回）「献上の御馬 御賀第一日」

馬が脚を蹴り上げるにより躍動感が増す。

10月2日（第一〇二回）「安元の大火 樋口富小路宿の主の放火」

庭の人物が消される。小川師書簡によると、佐藤春夫からの要望として「第一〇二回 火事宿の放火 障子に、かはらけの油をかけて火をうつし、それも成べく人に知れないやうにやったので、外で松明を持ち廻ってるやうなのは、直して貰へたらとの事でした。」(12/22) とある。

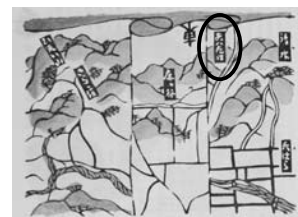
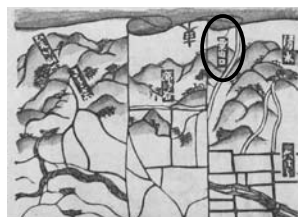
10月2日（第一〇二回）



10月5日（第一〇五回）地図

「栗田口」→「あはた口」。右上部の木々の一部が削除。

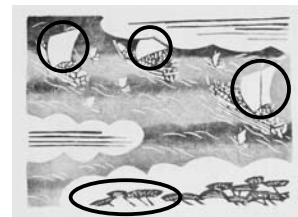
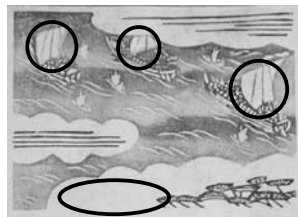
10月5日（第一〇五回）



10月21日（第一二一回）「平氏海上に浮ぶ」

船の帆が白く抜かれている。また手前の松は新聞版と講談社版で異なるが、一枚刷りの新聞版原本では当該の松を切り抜いて消していることから、本来の意図は新聞版にあると見られる。

10月21日（第一二一回）



10月25日（第一二五回）「源義経」

「源義経」の文字が画中より削除。なお「極楽から来た挿絵集」では、再び「源義経」の文字が挿入されている。

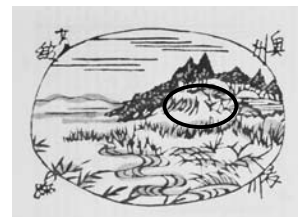
10月25日（第一二五回）



11月11日（第一四二回）「奥州衣川 高館の跡」

講談社版では草木がまばらになっている。一枚刷りの新聞版原本にて、型紙を用いて染めた上で手描きにより草木を描き足していることが確認できた。

11月11日（第一四二回）



11月16日（第一四七回）「式子内親王」

左上に菊の花が表わされ、式子内親王の横顔がしもぶくれのふっくらしたものに変わる。菊花は一枚刷り新聞版原本では当該部分を切り抜いて消していることから、新聞版の菊花の配置は意図的なものであることがわかる。

11月21日（第一五二回）「熊谷蓮生」

背後の樹木が変更。

11月24日（第一五五回）「聖光」

十三名の僧侶から聖光の肖像へ変更される。

11月26日（第一五七回）「七ヶ條の制戒」

板葺屋根になる。

11月27日（第一五八回）「法本房安楽房の配流」

右から二人目の人物の衣の文様が丸文になる。

12月4日（第一六五回）「恵信尼」

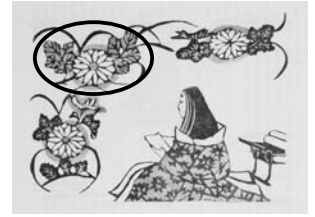
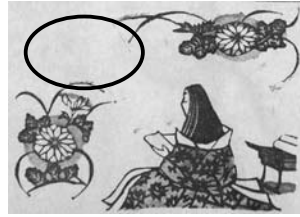
小川師書簡には、「一六五図の雪の背景ですが、後、文章の方が初夏の事と改められたので、あれは、星空にしてください可きだと思います。御気付きとは思いますが右一寸申し上げます。忘れてみましたので取り急ぎ。」(12/27)とある。小説本文の記述変更に伴う修正である。東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵の型紙を確認すると、彫られていた雪の一部を裏から小さな紙片で塞いだことが分かる。

12月5日(第一六六回)「上人頭光踏蓮図 関白九条兼実感見」

川の形が変わる。

以上、新聞への連載（昭和35年12月12日終了）から講談社版発行（昭和36年2月20日）までのわずかの期間に、芹沢が積極的に図様の改変を行ったことを示している。これらの中には、型紙が一部剥落したために起こった意図しない変更と見られる部分もあるが（第二回、第三回、第十一回、図四二回、第六九回、第七三回など⁹⁾）、多くは構図をよりよくするため、また主題をより明確にするための飽くなき追求である。またこれらの改変に当たっては、芹沢自身の意思に加え、小説の著者である佐藤春夫の要望が反映された箇所が少なくないことが確認された。佐藤からの感想や要望は小川師を介して芹沢に伝えられ、芹沢の答えは作品で表現されると同時に小川師によって言葉でも佐藤に届けられたのである。佐藤の求めた「(文と絵とが) 即かず、はなれずのところ」(7/1小川書簡)を実現するには、両者の思いを適切に伝えることができる人物の存在が不可欠であった。

11月16日（第一四七回）



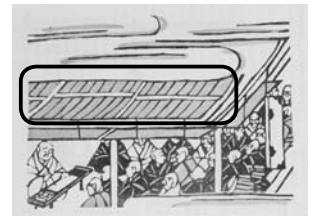
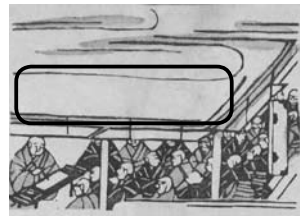
11月21日（第一五二回）



11月24日（第一五五回）



11月26日（第一五七回）



11月27日（第一五八回）



12月4日（第一六五回）



12月5日（第一六六回）



2) 小川龍彦師の指摘による改変

次に、新聞版から講談社版への改変の中で、特に小川師の指摘の重要性が高いものについて詳しく述べたい。

7月8日（第十七回）「山路行く師弟」（図10-7/8）

僧侶のまとう袈裟に関し、小川師書簡には「尚、ケサの件は15図（小川師による手書き絵あり） 図ノモノヨリモウ少シ此ノ線下ガルト尚ヨロシク思ヒマス。／17図（同上絵あり） 外出デ肩ヘコノ部分タクシ上ゲテキテヨロシイノデスガ、図デハ此处ガ描イテ無ク思ヒ気ニナリマス。」（12/22）とあり、手書きの図を付した上で詳しく着装の指摘をしている。「15図」に変更は認められないが、「17図」では左肩にたくし上げた衣の襷が追加されている。書簡の記述を踏まえなければ見落としかねない、大変細やかな変更である。

また、左手前の草花を黒地から白地に改めたことにより、人物の袈裟の黒色が際立ち、見る者の視点が中央の人物に集約するようになった。

7月16日（第二五回）「阿弥陀佛空中往立図」（図10-7/16）

新聞夕刊に「阿弥陀佛空中往立図」が掲載されたすぐ翌日に投函された小川師の書簡には、「あみだぶつの昨夕の御姿よくよく細部に渡って拝見すると、手の印相が違ってゐるのに気付きました。親指と次ぎの指とで両手とも小さい円相を作っているのがほんとうなのです。約束があると矢張りそれに従って置かれる方をよく思いました。」（7/17）とある。

新聞版で描かれた阿弥陀如来は、右手を施無畏、左手を与願に表わし、裳をつけ大衣を通肩にまとい、腹から足に沿ったY字の襷は腿の隆起を強調する。書簡の中で「あなたの用いられた法華堂三月堂のあれ」（7/24）とあることから、新聞版では東大寺法華堂（三月堂）の本尊不空羂索観音菩薩像の宝冠にあらわされた化仏の阿弥陀如来がモデルとなったことがわかる。しかしこの点について小川師は、報身仏（報仏）と応身仏（化仏あるいは応化身）との違いからモデルの選択が誤りであったことを訴えている。「報身仏は修業に報じて得る仏身で、化身仏はいろいろ人間天人畜生などの果報に応じて現れて来る仏身などで、変化身なので、種々雑多の姿を取るものです。極楽のミダは、四十八願成就の修業に報いて得られた仏身で、その国も亦報土なのです。先生の文章にも

報身法土とありましたがあれもお師匠の思い違いで報身報土と云はれなくてはならないところです。以上は顕教の浄土門の三部経に説くミダです。極楽のこのミダは報身丈でなしに、いろいろ化身をも現じ、縁に応じて衆生を救はれもします。」（7/24）仏教において仏の姿は經典や儀軌に則って規定されており、新聞版の阿弥陀は、不空羂索観音菩薩像の化仏すなわち応身仏をモデルにしてしまったために、本来描かれるべき極楽の報身仏としての阿弥陀ではないことを詳述し、ぜひとも「親指と次ぎの指とで両手とも小さい円相を作っている」来迎印に修正を願いたい旨を丁寧に説いている。浄土宗の僧侶である小川師にとって、阿弥陀如来の印相に強いこだわりを持っていたことは、最も多くの紙数を「阿弥陀佛空中往立図」の図様に割いていることから理解できる。

しかしこの変更に関しては、僧侶としてのこだわりと芹沢に対する信頼、そして制作者への配慮との狭間で、少なからぬ葛藤が見てとれる。新聞への挿絵掲載から1週間後の7月23日、改めて「阿弥陀佛空中往立図」についての記述が登場するが、そこには「アミダ仏と称してもいろいろあるので、極楽のアミダは報身なので、それには印相も、決められてゐるので、それを私の宗旨の人などが気がつくとうるさく思って申した丈の事で、私自身は絵の効果の上では取り上げてゐる訳ではございません。正しく出来たら正して置くにしかずと考へるのみ。あしからず。気にされない事です。化仏は、変化身で如何やうな姿でもよろしく本の図は化仏ですから、報身の依證には出来ない訳なのです。おかしくなければよろしいと私は思いますから気にされることはありません。本になる時、どうしても改めなければならない点があれば改められればそれで十分と思います。」とあり、阿弥陀仏の姿を作家に委ねる判断を下した。しかし明くる7月24日、今度は一転「昨夜のお便り、儀軌のことなど気にしないと申しましたが、成程自分ではたしかにさう考へて今もゐるのですが、しかし、矢張り、手の印契には気にしてゐないどころでなく、意識下では、どうも大変気にしてゐるのにそれを考への上で見のがしてゐたと云ふ風に思えて来ました。つまり指の動き形姿と云ふものは、仲々大変なことだと云ふ密教的考へ方が私にも、根づよくあると云ふ事です。ともかく指の取る形はさう馬鹿には出来ないのです。」として、改めて訂正を求めている。そして、新聞連載が終了した後の12月22日にも

また、修正を希望する箇所のひとつとして「第二十五図 アミダ如来立像の印相 拇指と人差し指とで両方とも円をつくる手印」を再度挙げているのである。

「阿弥陀佛往立図」は、その後の昭和42（1967）年、無量光寺で執り行われた小川龍彦師の逆修供養会に因み芹沢に依頼して制作された「散華」の中の図柄の一つにも選ばれている。この時の散華は、小川師の詠んだ歌3首、南無阿弥陀仏の名号、無量光寺山門、法然上人像、そして阿弥陀如来立像をモチーフとした七種からなるもので、図柄の選定は依頼者である小川師が行ったものと見られる¹⁰⁾。また、小川師が晩年身近に置いて親しんだという台紙に貼られた一枚刷りの「阿弥陀佛往立図」が現在もご遺族の手許に残されており、師にとって思い入れの深い一図であったことが窺われる。

8月23日（第六三回）「藤原成通」（図10-8/23）

成通が蹴鞠を行う場面について、小川師は翌日の書簡に「シマッタと思いました。と云ふのは、舞台が清水寺の舞台になってゐないで、何処か他の寺の平場の舞台になってゐるのに驚いたのです。」と記し、続けて「清水のあの何丈かの何十本の柱の上に支えられた舞台でこそ成道の^(ママ)ケマリが危険この上ないものになるのだし、その絵は、甚だ効果的なものになった筈です。これは全く残念この上なしでした。あれでは危険極まりないケマリの稽古とはなりませんもの。絵がこの上なく躍動してゐて、無類な丈に残念至極です。先生もさぞ惜しき限りに思はれたと思います。家内も成道の様子^(ママ)動勢が得も云はれず、上出来に出来てゐる丈惜しがる事しきりです、正にくやしいばかりの云いざまです。何れ本の時に改められれば良いと云ふものの大勢の人をあとと云はせる場面だった丈に甚だ心残りでまことに嬉しい事の限りでした。」（8/24）と悔しさを滲ませ、新聞社に絵の検討方も要求しておかれてはいかがかといった提案をしている。

講談社版で改められた清水の舞台上の蹴鞠のさまは、期待通りの緊張感ある一瞬を捉えており、加えて右手に回り込む縁側によって構図に奥行きが追加された。¹¹⁾

11月24日（第一五五回）「聖光」（図10-11/24）

十三名の僧侶から聖光の肖像へと大きく図様変更された第一五五回について、小川師書簡には「どうも知恩院でも親ら

ん（親鸞 筆者注）ばかり持ち上げずに何とか聖光を出してほしがりますので一つ一図として聖光の肖像を造って下さいませんか。大勢ゐる図と入れかへをこれ丈はお願い致す事に決心致しました。」（12/25）とある。聖光房弁長（1162～1238）は、浄土宗の第二祖とされる鎌倉前期の僧。はじめ比叡山で天台を学ぶが、後に専修念仏を唱える法然の弟子となる。元久元年（1204）までの前後8年間を法然の膝下で師事、親しく面授付法を受けて念仏の教えを継承した。宗祖法然の入滅後、浄土宗が聖道諸宗からの激しい非難攻撃を受けると同時に、門弟による廃師自立の異議続出する中にあって、法然上人の選択本願・専修念仏の教えを後世に正しく伝えることに努め、浄土宗の正流の宗学を確立した人物である。小川師は12月27日の書簡でも「本を数売るためにも、又、百五十五図の図を、聖光の肖像に改めることお願い致したく思います。」と述べている。同じ法然の弟子にあって、浄土真宗の開祖となる親鸞ばかりでなく、法然の跡を正しく継いだ聖光も登場させてほしいという、二祖・聖光上人に対する宗門の思いであろう。

聖光上人の肖像について、小川師は「平凡社の旧刊の美術全集の索引でお調べ下さい。続編に入ってます。国宝全集（コロタイプ版でした）にもあった筈です。」（12/25）、「聖光の肖像は望月氏の仏教大辞典シヨウコウの処（通頁四千何頁か）にあります。これは線画でハッキリしてゐますから、平凡社美術全集続編が厄介でしたら、これに従って下さい。」（12/27）とのアドバイスを出しているが、昭和32（1957）年に平凡社から刊行された『世界美術全集（普及版）』の索引、あるいは龍谷大学編纂『仏教大辞彙』に該当するものは見られなかった。聖光像として知られる福岡・善導寺所蔵の彫刻「聖光上人坐像」は、念珠をつま繰る手と合掌手の違いは見られるものの、正面を向く老僧のおだやかな目もとに通ずるものがある。

3）変更されなかった点

書簡中にて小川師が図様に関する希望を口にしつつも、変更されなかった点は以下の通りである。

6月30日（第九回）「村祭りの喧嘩」

「村の喧嘩の図の家の彼方に低い山の姿をほしく思いました。」（6/17）

8月10日（第五〇回）「照寂止観 大原の三寂」



11月8日（第一三九回）「一枚起請文 建暦二年正月」



図11 「極楽から来た」挿絵（左：新聞版 中：講談社版 右：挿絵集）

9月26日（第九六回）「巖島御奉」

「「巖島御奉」哀歎無常の（一）は水かげが仲々よく情趣溢れたものです。只、廊に今少し重さがほしく思いました。重厚に稍かけたものを感じました。少しこの図丈が一寸浮く気がするのです。」（10/1）

10月1日（第一〇一回）「白山事件」

「昨夜の挿絵、神輿の矢の当たった処を画かれ、最も適切な把え処と思います。文には出てみませんが、あの時は神輿の鏡を矢が射たとある文がありますし、神輿正面に神鏡がかかってゐると尚とハッキリ、画にももう一層中心が出来てよくはないかと思いました。」（10/2）

「村祭りの喧嘩」に関しては未だ新聞連載が始まっておらず、試作を見ての感想であるので、小川師の目にした試作がどのようなものであったかは不明である。しかし新聞版を見る限り、家の背後には木立がそびえ、遠景の山を認めることはできない。「巖島御奉」「白山事件」においては、いずれも新聞版の図様が講談社版にそのまま再録されている。ちなみに「白山事件」の場面は、「挿絵集」の筆彩本を見ると、薄藍の色差しの効果によって神輿の側面に三連に連なる円形があたかも神鏡のように見える。これらは芹沢が自身の判断で敢えて手を加える必要を感じなかったものであろう。

4) 「挿絵集」における図様改変により生じた誤り

昭和36（1961）年7月に刊行された型絵染の「極楽から

来た挿絵集」では、各挿絵中にそれぞれの場面を示す表題が型絵染の文字として加えられた。これは「挿絵集」が絵のみで構成されることから、小説のストーリーを明確化するために行われたものである。しかしこの表題の挿入により、二つの誤りが生じてしまった。

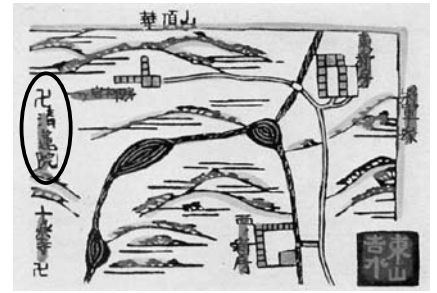
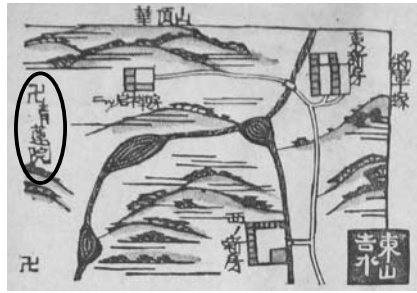
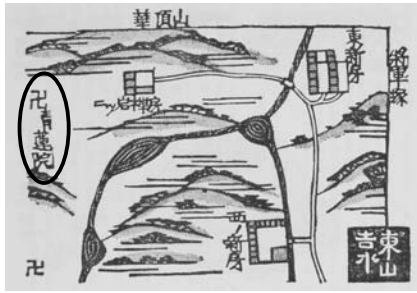
8月10日（第五〇回）「照寂止観 大原の三寂」（図11-8/10）

新聞版および講談社版と「挿絵集」とでは、上下が逆になっている。図様は元もと、右上から左下に向かって流れる流水の周囲に菊と紅葉をあしらったものである。しかし「挿絵集」では上下が反転し、水の流れは左下から右上に向かう不自然なものになっている。「極楽から来た挿絵 一枚刷り」の中に含まれる新聞版の原画と見られるものには、墨書きの文字で「上・下」の注記が確認され、当初は画面の向きに特に注意をはらっていたことがわかる。その後、挿絵集用に型紙に文字を貼り付ける際に上下を誤ったものであろう。

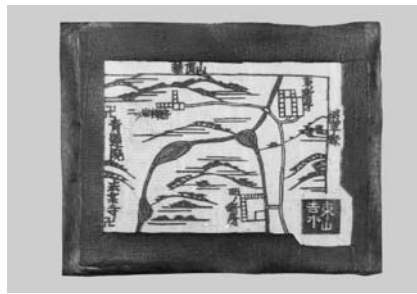
11月8日（第一三九回）「一枚起請文 建暦二年正月」（図11-11/8）

「はじめに」で述べたように、該当する小説本文には「65歳の法然上人が、4月8日、病床内で『没後遺戒文』という門弟たちに宛てた遺書を作った」とあり、画中の「一枚起請文」の文字とは一致しない。新聞連載時には図中の表題はなかったことから、文字を入れる際に誤って内容とずれてしまったものと思われる。

11月20日（第一五一回）



参考）小川師自筆地図



参考）型紙

また表題挿入による誤りとは異なるが、11月20日（第一五一回）の地図（図11-11/20）において、「青蓮院」の文字が「清蓮院」に改められ、「十楽寺」が追加、また一ツ右禅房の形が異なるなどの変更が認められる。地図としては「青蓮院」が正しいが、新聞連載時の「青」の字は不自然に左側に空間ができていたことから、芹沢の提出した新聞用、講談社単行本用の挿絵は「清」の字で作成されていたが、各社で誤りに気づきサンズイ部分を削った可能性も考えられよう。しかし芹沢の手元の型紙は「清」の字で作成されていたため、後日「挿絵集」を作る際は元の「清」に戻ってしまったのではなかろうか。なお新聞版の誤りについては、12月19日の小川師書簡に訂正用の手書きの地図が同封されているが、挿絵集に至るまでこの指摘が正しく反映されることはなかった¹²⁾。

おわりに

佐藤春夫が小説「極楽から来た」の執筆に要した時間と、佐藤が小川師と資料談義に使った時間とは等量だったという。その上、小川師は「芹沢氏に連載中殆ど毎日あれこれと便りを書いた」と記している¹³⁾。まさに「極楽から来た」は、佐藤春夫と芹沢銑介、そして小川龍彦師という三者の連携によって生み出されたといえよう。

昭和11（1936）年の日本民藝館開館式当日、小川龍彦師は、大広間の南壁に展示されていた芹沢銑介作『絵本どんきぼうて』（6図展示）に感動して、同じ手法で『法然上人絵伝』制作を芹沢に依頼したいと発案した。やがて、濱田庄司にそ

の思いを打ち明け、柳宗悦の後押しもあって制作は具体化する。ほぼ同時期の昭和12（1937）年、小川師は『往生寺法然上人像図録』（限定100部 図録刊行会）を編集・発行する。この本の装幀の文字を担当したのが芹沢だった。昭和10（1935）年、宮城県栗原市栗駒の浄土宗の寺院・往生寺で、法然上人在命中に制作されたと伝わる像を発見して、コロタイプ版の図録を刊行したのだった。小川師は「これが私の仕事に芹沢氏の力を借りた最初であった」と記している¹⁴⁾。『法然上人絵伝』は昭和16（1941）年によく完成するが、それ以前に6種の法然上人御影も制作された。それが機縁となって昭和36（1961）年の小説「極楽から来た」の新聞挿絵担当へとつながり、さらには昭和42（1967）に小川師逆修供養会の散華制作、昭和49（1974）年の浄土宗開宗800年大法要にあたっては、小川師の推薦により知恩院大殿内陣莊厳布、僧侶の袈裟、散華制作を行ったのである¹⁵⁾。

一方、佐藤春夫と芹沢銑介の関わりは、昭和31（1956）年に河出書房から出版された『自選 佐藤春夫全集 第1～10巻』の装幀を手がけたのが最初である。鼠色の紬地に笹文を配し、箔押しの文字が美しい装幀は、著者も喜んだという。次が朝日新聞に連載された小説「極楽から来た」の挿絵担当、続いて昭和38（1963）年4月8日～39年5月25日まで週刊「芸生新聞」に連載した小説「文化の反逆」の挿絵¹⁶⁾も担当した。

昭和38（1963）年の『本の手帖27号』に書いた「芹沢銑介を言ふ」¹⁷⁾の中で佐藤は、一度彼の来訪を受けたことがあるものの、個人的にはあまり知らない。しかし芹沢の仕事には注目をして、特に古い友人の小川龍彦師の著した

『法然上人絵伝』の挿画には感銘を受けたと記している。だから、新聞に法然上人の伝記を小説として書こうと思い立った時、挿絵は芹沢にと、すぐに考えついたのだ。さらに佐藤は昭和36(1961)年の『民藝 100号』に『「極楽から来た」のさし系」¹⁸⁾』という文章を書いているが、その中で、自分の生硬で難解な文章に比べると、挿絵は一目瞭然でその美を訴えていて好評であったこと、さらに自分が「挿画家芹沢銈介の発見者」といわれていることを「望外のほまれ」であるとまで書いて、芹沢に挿絵を頼んだことを喜んでいる。

小川師の書簡は、新聞を見るとすぐ、その日のうちに出している場合が多い¹⁹⁾。小川龍彦師のご遺族は、「新聞を見るとすぐに書いた手紙を、頻繁に出しに行ったことを覚えていますが、芹沢からの返事は書簡というよりは、電話が多かったようだ」と語っている。新聞連載という時間を待つてはくれない仕事の中で、小川師から送られてくる感想や激励に対して、芹沢は「極楽から来た」という自らの作品を通して自分の思いを伝えようとしていたように思う。仕事に全力で打ち込むこと、それこそが小川師への返信であったのであろう。

芹沢の一番最初の弟子・岡村吉右衛門は、傍らにいた弟子ならではの観察眼で、芹沢と師の間柄を次のように語っている。「小川氏の表に出ぬ配慮も定評があり、名コンビ振りを芹沢、小川二人を別人に分けて考えることのできない程の間柄です。(中略)『極楽から来た』では新聞が出る度、当然それは毎日のこととなりますが一回も欠かさず喜びの便りを出されたと聞いて居ります。普通の人ではとても出来ることではありません。かう云ったことは仕事をする者にとって一面重荷にもなりませうが、先生は感謝を以って受け容れてゐられたやうです。大きな励みとなり、心の鞭ともされたと思ひます。」²⁰⁾ 作家にとって作品の内容に変更を求められ、それを前向きに受け入れることは決して容易いことではない。小川師からの指摘を受け図様を改変するという芹沢の素早い反応には、指摘が妥当であれば真摯に受け止め作品に生かすという、芹沢の仕事に共通する謙虚さが伝わって来る。

また小川師にとっても芹沢の仕事に対する深い信頼があったればこそ、図様の変更という難しい要求を出すことができた。自らも文筆を行う身であれば、作品の修正を他から指摘されることがどういうことか、よく理解していたであろう。互

いに対する信頼がなければ決してできないことである。小川師は長年の法然研究の成果や自らの持つ資料を惜しみなく提供し、佐藤と芹沢の仕事を支え続けた。その無私の姿勢は驚嘆に値する。「極楽から来た」の新聞連載が終了してから一週間後の12月29日、小川が芹沢に宛てて送った手紙には次のような言葉がある。「若い時から、何となく感じ、求めてゐたものが、皆様の御力で、私にも、今年ほど具体的に見えて来た事はございません。結局、おぼろげに永年私の感じてゐたものは、実在してゐたのです。それを貴方と先生とによって、極楽から来たの文と絵とで、はっきり、見せていただいのです。本源的に人間が何を求めてゐるか云ふ事を極楽から来たとその挿絵は、人皆に、最も直接に、姿形で、色や響きや香で教えると同時に実物そのものを与えてくれてゐると思います。師匠の文と貴方の絵ほど、現代の我々に、最後の世界を拓き見せてくれてゐるものは他には無いと云ふ気がします。だから、私は御二人に、いくら御礼を申しても申しつくせない思いがするのです。この作品と挿絵の生れた、今年を、私の生涯の最上の年であったと、歳末の今日、肝に銘じて永く忘れ得ない感を新にしてゐます。(後略)」小川氏書簡の文面からは、常に佐藤と芹沢への敬愛と篤い信頼がほとばしり出ている。

佐藤春夫は、「目先が変わっていてめづらしいというだけでなく、印象深く感銘があり、様々な変化を見せて、小説に伴奏してくれた」¹⁸⁾と評して挿画家芹沢銈介誕生を喜んだ。新聞小説「極楽から来た」の挿絵173図を型絵染で制作したことは、芹沢にとっても大きな挑戦であったはずである²¹⁾。名コンビ小川龍彦からの大きな励みとなった書簡約130通は、芹沢が新しい分野を開拓した記念すべき仕事を物語るものでもあった。だからこそ芹沢はその手紙を整理して大切に保管していたのだろう。

付記

芹沢銈介作品掲載にあたり芹沢恵子様の格別のご配慮と使用許可をいただき、ここに深く感謝申し上げます。また小川龍彦師書簡の引用をご快諾いただき、調査へのご高配を賜りました小川龍蔵様、小川明子様に深く御礼申し上げます。

図版転載についてご承諾くださった朝日新聞社、講談社にも心より御礼申し上げます。英文要旨については東北福祉大学のKen Schmidt准教授にご協力いただきました。感謝申し上げます。

註

- 1) 『新版 極楽から来た』(2009年11月1日 浄土宗) 出版のいきさつについては、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館副館長の芹沢恵子氏のご教示による。
- 2) 小川師書簡に残っているのは、10 / 28夕「維盛入水」挿絵についての記述の次は、11 / 20朝の書簡である。「式子内親王」「房籠りの法然」「色々の花も紅葉もさもあらばあれ冬の夜深き松風の音」挿絵についての記述はあるが、「穢土のかたみ」(四)の病床内で『歿後遺戒文』を書いた挿絵についての感想はない。
- 3) 福地佳代子「(研究資料紹介) 芹沢銈介『散華』」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』2号 2011年 p73口絵 pp97-105
- 4) 『『極楽からきた』絵抄 頒布会趣旨』の小川龍彦師選の絵抄目録の記述にそったが、() 内は「極楽から来た挿絵集」にある画面の表題。筆者は「頒布会趣旨」(個人蔵)だけを見ることができた。「極楽からきた絵抄」の存在については、静岡市立芹沢銈介美術館の白鳥誠一郎氏のご教示により確認できた。
- 5) 『民芸手帖』7月号(1961年7月1日 東京民芸協会) p54に一枚ずつ額装した挿絵の展示風景写真が掲載されている。この展覧会(後援 朝日新聞社)は「大阪の第1回展に続き第2回展」とある。
- 6) 芹沢銈介の弟子で染色家の土手武彦氏、千鶴子氏によれば、「『極楽から来た』の新聞挿絵型紙はほとんどを鎌倉市・津の小庵で彫っておられた。挿絵集制作時には助手を務めたが、先生は「大変だ」とおっしゃりながら表題の細かな文字部分の型紙を彫って、新聞挿絵型紙の紗張りの目がつぶれないようにラッカーで貼りつけていらした」とのことである。
- 7) 小川龍彦師の葬儀に際し作られた小冊子「故小川龍彦儀 本葬式」(昭和57年2月20日 無量光寺) 所収の「小川龍彦(法然上人史料編纂所長)の業績概要」には39件の研究論考、4件の単行本刊行、3件の雑誌掲載、3件の新聞掲載、4件の講演発表などが示され、枚挙に暇がない。
- 8) 小川師書簡の投函日は下表の通り。

月	日		ハガキ (枚数)	手紙 (枚数)	郵便書簡
6	17			3	
6	17	後便	3		
6	18		1		
6	20	午後11時	1		
6	21	朝	1		
6	22	夕	1		
6	22	夕後報	1		
6	23		2		
6	24		1		
6	25	夕	1		
6	27		1		
6	29	午後	1		
7	1	朝		1	
7	3		1		
7	11	朝	2		
7	12		6		
7	13	夕	1		
7	14	朝	1		
7	14	(後便)	1		
7	15	朝	1		
7	15		1		
7	15	夕	1		

月	日		ハガキ (枚数)	手紙 (枚数)	郵便書簡
7	16		2		
7	16	夕	1		
7	17	正午	1		
7	20	朝	1		
7	21	早朝	1		
7	21	夜			1
7	22	朝	1		
7	22	朝後便	1		
7	23	朝	2		
7	23	夕	2		
7	24	朝		2	
7	24	夕	2		
7	25	未明	1		
7	26	朝	2		
7	26	午後			1
7	26	夕	1		
7	30		1		
7	31	朝	1		
8	3	夕			1
8	3	夜	1		
8	4	早朝	1		
8	5	朝	1		
8	5	夜	1		
8	6	夕	1		
8	7	夜	1		
8	8	夕		1	
8	8	夜10時半	1		
8	9	夕	1		
8	11	朝			1
8	11				1
8	12		1		
8	13		1		
8	14	夕	1		
8	23	夕	1		
8	24	夜			1
8	28	夜			1
9	1				1
9	4	午後			1
9	7	午後			1
9	8	午後			1
9	11				1
9	12				1
9	13				2
9	14	夜	2		
9	15				1
9	17	夜			1
9	18				1
9	19				1
9	20	夕	2		
9	21	夜	1		
9	22	昼前		1	
9	22	夕		1	
10	1			3	
10	1			3	
10	2				1
10	2	夜			1
10	6	午後			3
10	7	朝			1
10	10	夜		2	
10	12	午後		2	
10	13			2	
10	14	朝	1		
10	14	午後	1		
10	14		1		
10	21	夜	1		
10	23	夜11時		2	
10	26	夕		1	

月	日		ハガキ (枚数)	手紙 (枚数)	郵便書簡
10	28	正午	1		
10	28	夕	1		
11	20	朝		2	
11	27	朝8時過ぎ		3	
12	1			1	
12	2		1		
12	10			3	
12	11	夜	1		
12	12		1		
12	12	夕4時半	1		
12	15	朝	1		
12	19			3	
12	22	朝		1	
12	25		1		
12	27		1		
12	27	午後	1		
12	27	夜	1		
12	29	夜		2	
12	31	正午	1		
1	3	夕	1		

- 9) 10月22日(第一二二回)「安徳天皇」は、「挿絵集」の段階で童子の口が描かれなくなるが、これも型紙から口部分が欠失したために起こったものであろう。

10) 前掲註3 pp98-99

- 11) 8月24日の小川師書簡には「実は昨日朝、米原で能登の寝台車を五時に降りて乗りかへて大阪へ出たのですが、その時買った朝刊の小説欄に極楽から来たの後白河の(三)を見つけ、挿絵に、机に向った院らしい人影を拝見、少しおかしいと思いましたが、又入れ換ってゐるかも知れない何れわかる事とその日の夕刊は見ず、疲れても居り家の床でやすみ今日になり、夕刊を見ると、昨日の米原のと同じ挿絵が出てゐるではありませんか。調べると昨日の夕刊はけまりの図で、矢張り米原の朝刊は挿絵間違つて入つてゐたことを発見しました。」とある。夕刊では順番の入れ違いは生じておらず、朝刊に再掲の際に起こった手違いとみられる。

- 12) 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館蔵の型紙には「極楽から来た」11月20日(第一五一回)の地図が含まれているが、新聞版、講談社版、挿絵集のいずれとも異なり、小川師の指摘が反映されたものとなっている。可能性として、昭和36年(1961)7月に刊行された「極楽から来た 絵抄」の際に修正された型紙であることを指摘したい。

- 13) 小川龍彦「芹沢氏の挿絵 法然をめぐるの廿五年」(『民藝』4月号 第100号 日本民藝協会 1961) pp12-16

14) 前掲註13

- 15) 浄土宗総本山知恩院では、2011年10月2～25日に法然上人800年大遠忌法要が盛大に執行された。その際、大殿の内陣には芹沢銈介が昭和49(1974)年に制作した水引と柱巻、打敷からなる荘厳布が掛けられたとのことである。

- 16) 連載から4年後の昭和42(1967)年7月、吾八から『文化の反逆挿絵集』を刊行した。型絵染59図内5図筆彩、自題桐箱葛布帙 表紙強製紙黄土染 和綴 限定10部。

17) 『本の手帖』27号 1963年 昭森社 pp554-555

- 18) 佐藤春夫『『極楽から来た』のさし系』(『民藝』4月号 第100号 日本民藝協会 1961) pp10-11

19) 前掲註13

- 20) 岡村吉右衛門「芹沢先生の本」『本の手帖』27号 1963年 昭森社 pp572-576

- 21) 1960年の連載小説『極楽から来た』の型絵染挿絵(173図)が大好評だったことから、1963年～翌年の佐藤春夫の『文化の反逆』(59図 週刊芸生新聞)、1965年の武田泰淳の『中国忍者伝 十三妹』(145図 朝日新聞)、1967年の石野径一郎『守礼の国』(24図 朝日ジャーナル)と、連載小説の型絵染による挿絵制作の仕事が続いた。

図版出典

図10・11

新聞版「極楽から来た」挿絵部分(『朝日新聞夕刊』1960年6/23、6/24、6/25、6/28、7/1、7/2、7/7、7/8、7/11、7/16、7/30、7/31、8/2、8/10、8/15、8/16、8/17、8/23、8/29、8/30、8/31、9/2、9/19、9/29、10/2、10/5、10/21、10/25、11/8、11/11、11/16、11/20、11/21、11/24、11/26、11/27、12/4、12/5)

講談社版「極楽から来た」挿絵部分(佐藤春夫著・芹沢銈介挿絵『極楽から来た』1961年 講談社 p.11、13、15、21、27、29、39、41、47、57、85、87、91、107、117、119、121、133、145、147、149、153、187、205、211、217、249、257、285、291、301、309、311、317、321、323、337、339)